

論 文 要 約

論文題目 宗教論と趣味論を中心としたヒューム啓蒙主義思想の包括的検討

申請者 西内 亮平

論文要約

本稿には二つの目的がある。より局所的な目的は、ヒューム(David Hume, 1711-1776)の宗教論と趣味論を検討することである。この二つの領域は、とりわけ国内のヒューム研究において取り上げられる機会は少ないが、それは両者の重要性が低いということでは決してない。ヒュームが終生、大学の教授職に就けなかったのは彼の哲学が宗教にもたらすと考えられた破壊的な影響の故であったし、宗教論はヒュームにとって『人間本性論』の準備段階から死後出版の『自然宗教をめぐる対話』に至るまで一貫して主要なテーマであり続けた。認識、道徳、政治経済、文芸批評、歴史など、ヒュームがあまりにも多くのことを論じているがために、ヒューム研究は他の論点との相互の関係がどうしても見えにくいものとなってしまいやすい。このような現状において宗教論は、ヒュームの全体像を捉えようとする際の切り口の一つとして非常に有効なものになるだろう。

またヒュームの趣味論は、美学史や分析美学の分野でも一定の注目を持って扱われ、重要な古典的研究もいくつか存在する。しかし、ヒューム研究においては比較的等閑視されてきた領域と言える。趣味はヒュームにおいて道徳と批評に関わるが、とりわけ彼のエッセイ集の第1部は「趣味の繊細について」から始まり、「趣味の標準について」で閉じられ、これによりある種の統一性が与えられている。また従来の研究で趣味論が扱われる際には、その関心はもっぱら「趣味の標準について」というエッセイに集中して注がれてきた。そこで本稿では、他のエッセイや『道徳原理研究』などのテキストも考察対象にし、ヒュームの趣味論が持つ可能性を掘り起こしてみたい。

第二の目的はより俯瞰的なものである。それは啓蒙思想における自己超克という試みである。啓蒙思想は十九世紀のロマン主義を始め多くの批判にさらされてきたが、啓蒙思想が抱える問題に対して、啓蒙思想自身のうちにそれを乗

り越える契機を見出すことを目指そうとする。「啓蒙の時代」を代表する思想家の一人であるヒュームの思想を掘り下げ、**Black Lives Matter** 運動の盛り上がりとともに近年盛んに批判されている、ヒュームに見られる「人種主義」という啓蒙思想においてある種典型的な——しかし決して普遍的ではない——見解を、ヒューム哲学の論理によって批判し、それに代わる構想を発展させる可能性をヒューム哲学の内部に見出そうと試みる。これは、過去の思想家を現代の基準に照らしてただ批判することでもなく、また当時の文脈を踏まえ情状酌量することでもない。古代から現代に至るまで続く人種主義という根深い問題に対して、それを生み出した源泉の一つである啓蒙主義の内側からそれを乗り越える契機を探る試みである。

議論は以下のように展開する。まず第一部において、啓蒙思想家ヒュームの〈光〉となる側面すなわち宗教的迷信への批判を検討する。特に本稿では、ヒュームの時代に大きな影響を誇った自然宗教（自然神学）への批判を中心に検討する。そして第二部において、〈影〉となる側面すなわちヒュームに見られる人種主義を確認し、それを乗り越える鍵を彼の趣味論に見出そうと試みる。

各章の内容について簡単に示すと次のようになる。まず第1章「ヒュームの思想形成とニュートン主義」では、本稿全体に向けた準備作業としてヒュームの置かれた思想史的状況を確認する。特に、ヒュームをはじめとしたスコットランドの知識人たちが同時代の自然学をどのように受容したかを、先行研究を助けとしながら見ていきたい。その結果、かなり早い時期にニュートン主義を受容したスコットランドにおいても、ニュートン主義への自然学的あるいは宗教的な批判が存在しており、実はその受容が一筋縄ではなかったことが頭になる。こうしたヒュームの置かれた環境は、ボイルやニュートンの自然学から「実験的方法」をある種の経験主義として自身の「人間学」における方法論として継承しながらも、彼らの宗教論は退けるというヒュームの両義的な立場を理解する手掛かりとなるだろう。

第2章「ニュートンとボイルの宗教思想とヒュームの奇跡論」では、ボイルやニュートンの自然学の啓示神学的背景に注目する。科学史の先行研究において、十七世紀科学革命の知的背景として自然神学を支えとする広教主義のような穏健な宗教的立場の存在がこれまで指摘されてきた。しかし、ボイルやニュートンの宗教論においては奇跡や預言といった啓示神学も大きな地位を占めている。このことはヒュームも承知していたと推察され、彼の奇跡批判は表立つ

てではないものの、彼ら実験哲学の先人たちにもその矛先が向けられていた可能性を示唆する。

第3章「デザイン論証の構造分析」では、自然神学において中心的な神の存在証明である「デザイン論証」をヒュームがどのように理解し批判したかを検討する。その際、デザイン論証批判が最初に提出された『人間知性研究』第11章の議論と、晩年の『自然宗教をめぐる対話』の議論を比較し、その異同を確認していく。また現代の科学哲学において最も強靱なデザイン論証として、これをアブダクションないしは最善の説明への推論の一種とみなす解釈があり、これはヒュームの議論では批判しきれないとされる。本稿は、こうしたアブダクション型のデザイン論証を、ヒュームは自身の経験主義に基づき却下するであろうことを、テキストを示しながら論証していく。以上よりこの章では、実験哲学から学んだヒュームの経験主義が、実験哲学の推進力となった自然神学へと牙を向ける様子が明らかとなる。

第4章「宗教的信念の自然さ」では、ヒューム研究における古典的な問題の一つ、すなわち、デザイン論証によって形成される「世界の知的設計者としての神」の観念はヒューム哲学における「自然信念(natural belief)」であるか否かを検討する。「自然信念」というのは、外的事物の存在や心の同一性のように、徹底した懐疑によって疑われながらも、人間の心から取り去ることのできず不可避に抱かれる信念を指すものとしてヒューム研究者が導入した解釈用の道具立てである。本稿は、宗教的信念が不可避性を持たないことを理由に、自然信念ではないという立場に立つ。その上で、知的設計者の信念は、教育によって人間本性に沿った形で人々の心中にもたらされうることを示していく。ヒュームは啓示神学と自然神学の論拠を掘り崩しただけにとどまらず、宗教それ自体をも人間における一つの心理現象ないしは社会現象として、経験や観察に基づく人間本性の諸原理における起源を説明しようとしており、本稿の議論はその一側面を取り扱っていることになる。

第2部に入り、第5章「ヒュームと人種主義」では、ヒュームのエッセイ「国民性について」の註に見られるヒュームの人種主義をめぐる先行研究を手がかりに、この問題の論点の整理を行う。先駆的研究であるポプキンの諸論考からは、ヒュームの人種主義の源泉が人類の多起源説にあるというヒュームが人種主義を受け入れていた理由に関わる問題と、ヒュームの人種主義は自身の経験主義に反するという人種主義とヒューム哲学との論理的整合性に関わる問題と

が見出される。本稿はより後者の問題に注目する。とりわけ、ヒュームの趣味論との整合性が問われることになる。

第6章「ヒューム趣味論の可能性」では、ヒュームにおける批評すなわち美的判断について検討する。ヒュームにおいて美と道徳は趣味という心の働きで判断されるが、その際に判断の基準は存在し得るのか、そして存在するとしたらそれはどのようなものであるか。ヒュームは、批評家が(1)趣味の繊細さを高め、(2)偏見から自由になることで、真なる趣味の基準を持つと認める。しかしその基準には個人の違いや国・時代などの文化の違いによって生じる多様性が見出される。ヒュームは趣味の基準における多様性を認識し、それが生じる理由を解き明かしはするものの、基準が多様であること自体を賞賛するわけではない。このヒュームの姿勢は、趣味論だけでは解き明かし得ないため、自由論とりわけ言論の自由における記述を手掛かりとする。それにより、ヒュームが、経験と歴史に学ぶ自身の経験主義を貫きつつ、権威と自由の望ましい均衡点を探っていたことが確認される。ヒュームはウォルポール政権、ジャコバイトの反乱、ウィルクス事件など自身が経験した歴史的出来事を通じ、考察を深めた。権威と自由との均衡という年来の主張は変わらなかったが、野放図な自由によって生まれる弊害を晩年にはより警戒するようになったとは言えるだろう。そしてこれは愛着による党派の形成とその害という視点から趣味の基準の議論にも接続させることが可能だろう。

以上よりヒュームの啓蒙主義思想の特徴として、(1)ニュートンらの実験哲学を人間の問題へと導入する徹底した「経験主義」、(2)理性における宗教の根拠を掘り崩しつつも、宗教という現象それ自体をも経験によって確立された人間本性の原理から説明する世俗化された「人間学」の構想、(3)技芸・学知・人間性の相互連環的な向上という独特の「文明社会論」が析出される。